

普門寺遺跡

県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1987. 3

明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

普門寺遺跡

県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1987. 3

明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

序

昭和61年度は昨年度に引き続き清水端の県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査を行いましたが、本年度は同じ清水端でも「普門寺遺跡」と呼ぶ事に致しました。

普門寺は慶長2年（1599）創立で現在建物は消失してありませんが、跡地ははっきりと残って居ります。今回はこの普門寺付近の調査を致しましたところ、本報告書にあります様に平安時代の住居址および土器が出土して居りますので、この付近には大事な文化財が数多く埋蔵されているものと思われます。

またこの調査にあたり圃場整備工区の中にありました、五輪の塔群や板碑等も合わせて調査研究が進められ整備されたことは喜ばしい事と思って居ります。

この報告書が昨年の清水端の調査と合わせて、柄沢川に水を求めて生活していた事であろう私達祖先の歴史の解明や、また今後の調査研究に役立ってもらいたいものと期待します。

本調査にあたり、多大な御協力を賜わりました県文化課、峡北土地改良事務所、山梨文化財研究所の先生方を始め関係各位に深く感謝の意を表します。

昭和62年3月

明野村教育委員会

教育長 船 塙 敏夫

例　　言

1. 本書は山梨県北巨摩郡明野村上手字小袖地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 本調査は事業主体者である峠北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県教育庁文化課より補助金を受け、明野村教育委員会が実施した。調査に際しては財団法人山梨文化財研究所の協力を受け行った。
3. 本書の作成に際し、遺物の実測・トレース・写真撮影・執筆および編集は宮沢が中心となって行った。
4. 石造物の石質鑑定は河西学氏（山梨文化財研究所）が行った。
5. 発掘調査および本書の作成にあたり、次の諸氏、諸機関より御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。
 - 飯田文弥、植松又次、坂本美夫、佐野勝広、篠原紫歎、末木健、新津健、保坂康夫
6. 本調査にかかる出土遺物・諸記録等については、明野村教育委員会が保管している。
7. 発掘調査組織
 - 教育長　船瀬敏夫
 - 事務局長　新藤武義
 - 教委係長　雨宮智博
 - 調査担当　宮沢公雄（山梨文化財研究所）
8. 発掘調査および遺物整理作業参加者
有賀有子、伊東昭一、大村昭三、小沢いつ枝、五味省三、岸本美苗、倉田勝子、篠原義雄、関勝、平山勝子、深沢あさ子、福田すみ江、福田光子、細庭七郎、三塚てつ子、宮川寛、水森広徳、渡辺百合子

凡　　例

1. 押図の縮尺は次の通りである。
住居址 $1/60$ 、土壤 $1/40$ 、土器 $1/3$ 、五輪塔 $1/6$ 、板碑 $1/8$
2. 遺構挿図のレベルポイントは特に表記のない限り、同一図面上では同一レベルであるが、全体としては統一していない。
3. 石造物のスクリーントーン部分は欠損部を表わす。
4. 土器実測中、断面図が黒色のものは須恵器を表わしている。

目 次

第 I 章	調査経過	1
	第 1 節 調査に至る経緯	1
	第 2 節 調査方法と経過	1
第 II 章	遺跡概要	3
	第 1 節 普門寺遺跡の立地と地理的環境	3
	第 2 節 普門寺遺跡の歴史的環境	3
	第 3 節 屬序	5
第 III 章	遺構	7
	第 1 節 住居址	7
	第 2 節 土 壤	10
第 IV 章	遺構外出土遺物	13
	第 1 節 土 器	13
	第 2 節 古 錢	14
	第 3 節 石造物	14
第 V 章	明野村の板碑	25
第 VI 章	まとめ	27

挿 図 目 次

第1図 普門寺遺跡と周辺の遺跡	第11図 遺構外出土土器
第2図 普門寺遺跡全体図	第12図 古銭
第3図 普門寺遺跡遺物分布図	第13図 五輪塔計測部模式図
第4図 第1号住居址平面図	第14図 空・風輪
第5図 第1号住居址出土遺物(1)	第15図 火輪(1)
第6図 第1号住居址出土遺物(2)	第16図 火輪(2)
第7図 1・2・3号土壤平面図	第17図 火輪(3)
第8図 4・5号土壤平面図	第18図 水輪
第9図 6・7号土壤平面図	第19図 地輪
第10図 土壌出土遺物	第20図 板碑

表 目 次

第1表 空・風輪計測表	第3表 水輪計測表
第2表 火輪計測表	第4表 地輪計測表

図 版 目 次

図版1 1. 遺跡全景 2. 調査風景	
図版2 1. 第1号住居址 2. 第1号住居址遺物出土状況	
図版3 1. 第1号住居址遺物出土状況 2. 第1号住居址遺物出土状況	
図版4 1. 第1号住居址遺物出土状況 2・3. 第1号住居址出土遺物	
図版5 1・2. 第1号住居址出土遺物	
図版6 1. 1号土壤 2. 2号土壤	
図版7 1. 3号土壤 2. 4号土壤	
図版8 1. 5号土壤 2. 6・7号土壤	
図版9 1. 1号土壤出土遺物 2. 古銭 3・4. 遺構外出土遺物	
図版10 空風輪・火輪	
図版11 水輪・地輪	
図版12 五輪塔および板碑	
図版13 1・2. 五輪塔群	
図版14 1・2. おかま地蔵の板碑	
図版15 1・2. 下神取の板碑	
図版16 1. 福性院の板碑 2. 北組の板碑	

第Ⅰ章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

北巨摩地域では農業振興政策の一環として、昭和53年より圃場整備事業が行われているが、明野村においても昭和55年より県営圃場整備事業が行われている。昭和61年度には、明野村上手字小袖を中心とする13.2ヘクタールが圃場整備事業対象となった。本対象地域は昭和59年12月に明野村教育委員会が山梨県埋蔵文化財センターの協力を得て、試掘調査を実施していた。

その結果によると、事業対象地域の一部より土器片等が出土し、本調査実施の必要があるとの報告を受けていた。

整備事業実施前に山梨県教育庁文化課、岐北土地改良事務所、明野村教育委員会の三者で協議した結果、盛土保存を前提とするが、削平整地を行わなければならない約300m²を対象として、本調査を実施することとなった。

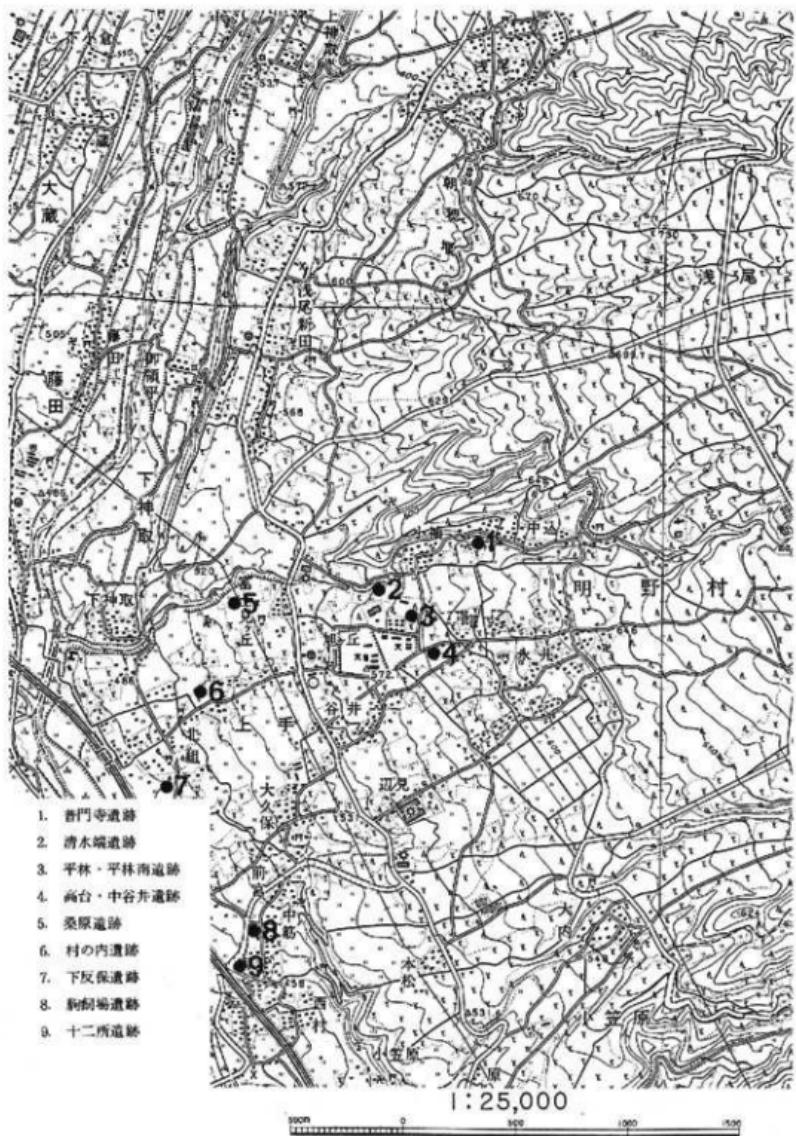
第2節 調査方法と経過

普門寺遺跡の発掘調査は、昭和61年9月11日より開始し、同年10月2日まで実施した。調査区域の表土を重機によって取り除いた後、人力によって、遺構の有無を確認することとした。

調査区内に、南北にA～F、東西に1～5のグリッド(5m×5m)を設定し、出土遺物については全点主義を原則として、取り上げた。

調査区東側では、水田耕作によって遺物包含層は削平されており、遺物の確認は殆ど出来なかった。そのため、南側での遺構確認に努めた。

その結果、D-2グリッドを中心として3基の土壙が、E-2グリッドを中心として住居址が4基の土壙と重複する状態で発見された。



第1図 普門寺遺跡と周辺の遺跡

第Ⅱ章 遺 跡 概 要

第1節 普門寺遺跡の立地と地理的環境

明野村は、山梨県の北西部に位置し、北は須玉町、東は中巨摩郡敷島町、南は韮崎市に接している。

本村は茅ヶ岳山麓西南の広大な斜面上に占地し、西側一帯は河岸段丘によって塩川でさえぎられている。村南西部を中央自動車道が、中央部を南北に茅ヶ岳農道が継続している。

茅ヶ岳火山は黒富士火山の寄生火山で、開析がすすみ、頂上部は茅ヶ岳と金ヶ岳の二峰に分かれている⁽¹⁾。

茅ヶ岳から放射状にいくつもの谷が出ているが、そのほとんどが空沢であり、僅かに北部を湯沢川、中央部を板沢川、南部を正樂寺川の小河川が東から西へ向って流れているのみである。しかし、それらの小河川による開析作用によって広大な斜面は起伏の多い地形となっている。

原の畠から粘板岩の礫が発見されることなどから、旧塩川は現在の流路よりかなり東側を流れていたと考えられる⁽²⁾。それが茅ヶ岳の開析作用によって塩川は次第に西へ流路をかえ、現在に至っており、その作用によって3段の河成段丘を形成している。

註 (1) 山梨県『山梨県地質誌』1970

(2) 明野村『明野村誌』1963

第2節 普門寺遺跡の歴史的環境

明野村は、茅ヶ岳の西南麓を占め、古くから数多くの遺跡があることも知られていた。昭和46年から51年にかけて山梨県教育委員会が行った分布調査において26遺跡が確認された⁽³⁾。

しかし、本村において正式に発掘調査が行われたのは昭和48年中央自動車道建設に先立って行われた早道場遺跡および西田遺跡の調査⁽⁴⁾、昨年度県営国場整備事業に伴う清水端遺跡の調査⁽⁵⁾が行われたのみであり、明野村に点在する遺跡についてはその実態が明らかにされていない。

分布調査における26遺跡の内1遺跡を除いては、すべて縄文時代の遺跡であり、明野村において普門寺遺跡と同時期と思われる平安時代以降の遺跡については現在までにその殆どが明らかにされていない。

しかし、村立公民館郷土資料室に出土地不明の土師質土器が展示されており、この土器については既に末木健氏によって報告されている⁽⁶⁾。

また、『明野村誌』⁽⁵⁾によると平安時代初頭と思われる土師器片が、上神取集落中央・御領平の道沿い・下神取の北端・北組宇波刀神社周辺・大久保源訪神社境内・小笠原小学校前・三之蔵集落南端・下久保などから極めて少ないながら出土している。

そのうち下久保からは、『市』と書かれた墨書き器が2・3片の須恵器と一緒に出土したらしい。

普門寺遺跡周辺に目を転じてみると、遺跡西側には遺跡名にもなった普門寺が存在した。普門寺については慶應四年戊辰年七月に寺社役所に提出された書上がみられる。¹⁾

- 一、本堂 梁間三間半 行間六間半
一、東司 梁間六尺 行間九尺
一、除地寺内境内 壱畝拾弐歩
一、除地 式畝廿歩 文殊堂領
一、文殊堂由緒書之儀天命明八戊申年四月二日焼失仕候後不相分事ニ御座候
一、開闢慶長二丁酉年？当暦迄式百六拾七年ニ相成申候

右之通相違無御座候以上

慶應四戊辰年七月

巨摩郡上手村淨林寺末

同郡同村

曹洞宗 普門寺 団

寺社御役所

また、遺跡西側には御崎神社がある。²⁾天文年間、武田の家臣が稻荷神を勧請して創建したと伝えられている。境内には石鳥居の他、巡拝塔、観音塔、不動明王像、毘沙門天像、などの石造物がある。

古代の甲斐国より国外に通ずる九筋のうちの穂坂路が遺跡のすぐ脇を迂回するように通っている。³⁾穂坂路は甲斐国最大の御牧である穂坂と甲斐の国府を結ぶ重要な道であったと思われる。国府より敷島・双葉町を経て韮崎市穂坂町三之藏集落より風越山を越えて明野村正楽寺集落に出る。集落中央より大内・永井を経て伊勢神明社の脇より北に進むと普門寺遺跡に突き当たる。それを右に曲り遺跡東側にある御崎神社を迂回するように柄沢川を渡って中込の集落を北進し、通称開拓道路を通り浅尾集落へ至る。これが古穂坂路と呼ばれているものである。この古代主要幹線の一つである穂坂路が地理的要因によらず普門寺遺跡付近で急に迂回することを考えると普門寺遺跡周辺の歴史的環境と深い関連があることも想定できよう。

- 註(1) 山梨県教育委員会『山梨県遺跡地名表』 1979
(2) 山梨県教育委員会『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1975
(3) 明野村教育委員会『清水端遺跡』 1986
(4) 末木 健「平安時代以降の土師質土器の編年」『信濃』28-9 1976
(5) 明野村『明野村誌』 1963
(6) 山梨県立図書館『社記・寺記』 1971
(7) 山梨県教育委員会『穂坂路』 1984
(8) 註(7) に同じ

第3節 層序

遺跡は東から西へ緩やかに傾斜する現河床から柄沢川の比高約2mの南側崖線付近に立地する。

第Ⅰ層 暗褐色土（耕作土）

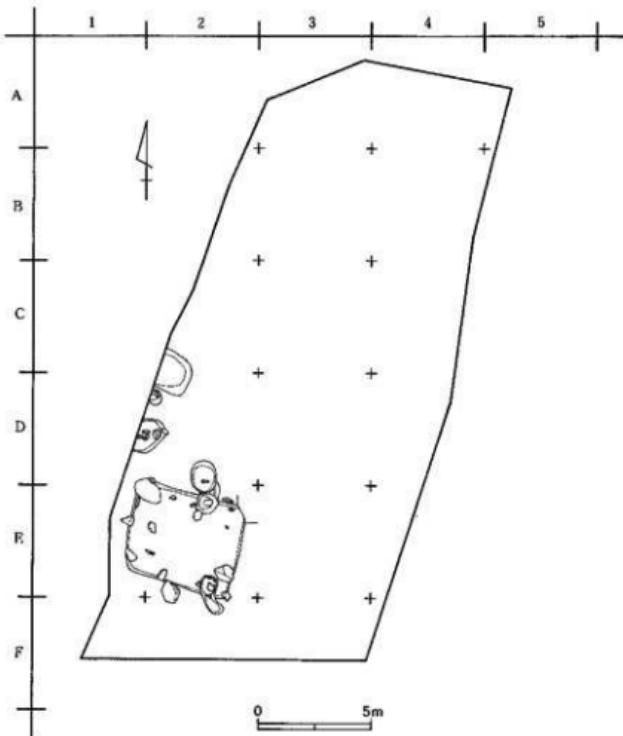
第Ⅱ層 褐色砂質土

第Ⅲ層 暗褐色土

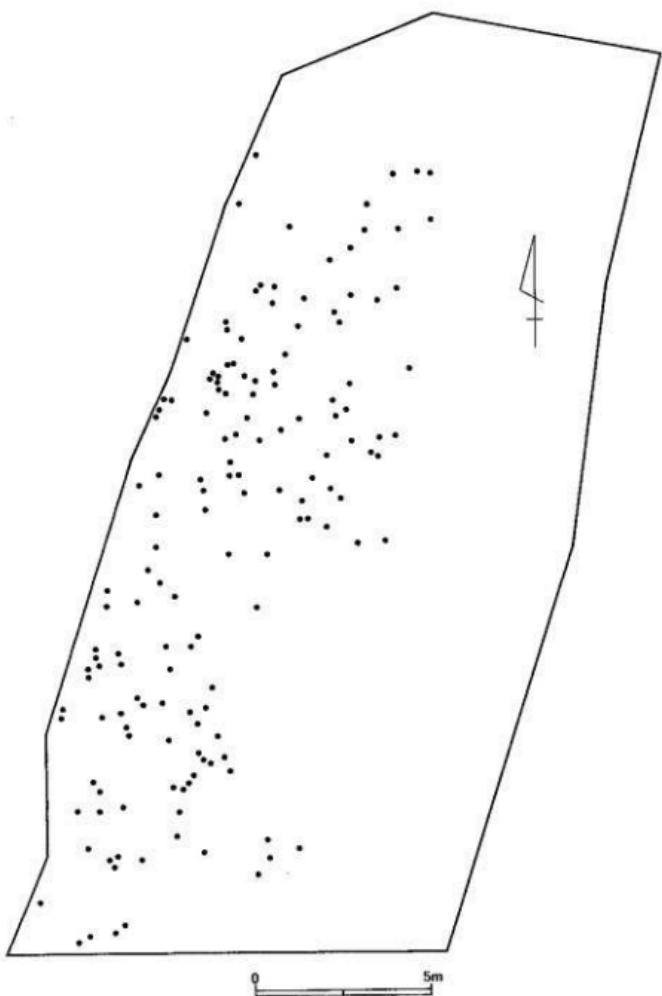
第Ⅳ層 褐色土

調査区北側では第Ⅱ層は顕著にみられたものの、南側においてはほとんどみられなかった。これは柄沢川の影響によるものであろう。

第Ⅲ層が平安時代から中世にかけての遺物包含層となっている。今回の調査によって検出された遺構は第Ⅳ層より掘り込まれていた。



第2図 普門寺遺跡全体図

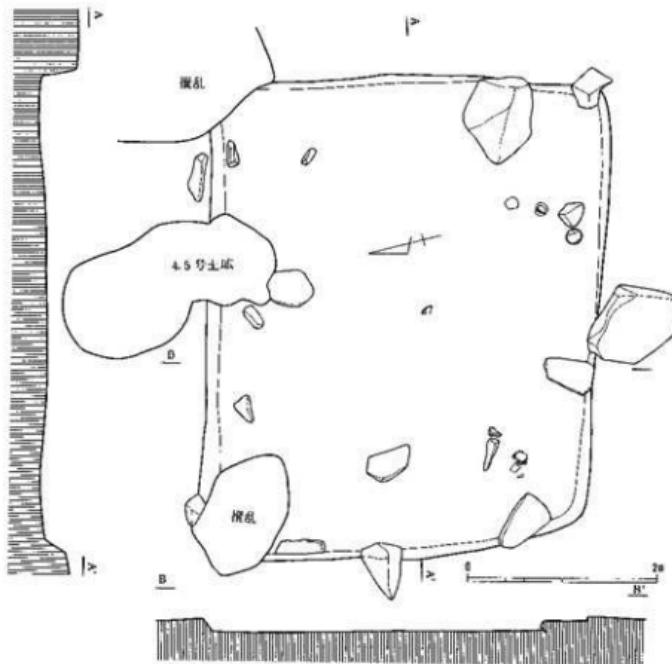


第3図 普門寺遺跡遺物分布図

第Ⅲ章 遺構

第1節 住居址（第4図）

本址はE-2グリッドを中心とした地区に位置する。北側壁の一部を5号土壤と、南側壁の一部を6号土壤とそれぞれ重複した形で検出された。隅丸方形を呈する住居址で東西長5.15m、南北長4.1mを測る。発掘区第Ⅲ層に礫の混入が多かったために遺構の検出に手間取り壁高は東側では37cmを測るもの、北側14cm、南側15cm、西側25cmを残すのみである。カマド、柱穴、周溝は確認されなかった。床面は北側両コーナーが搅乱を受けているものの、ほぼ全面にわたって踏み固められている。床面直上には焼土、カーボンが認められ、火災住居であると思われる。本住居址内には大きな礫がみられるが、地山には人頭大から3m程もある巨大な礫が多くみられることから、住居の構築に際し、掘り込み内に露出した石を除去せず住居内に取り込んだまま、使用したものと考えられる。遺物は土器のみであるが环類を中心としている。

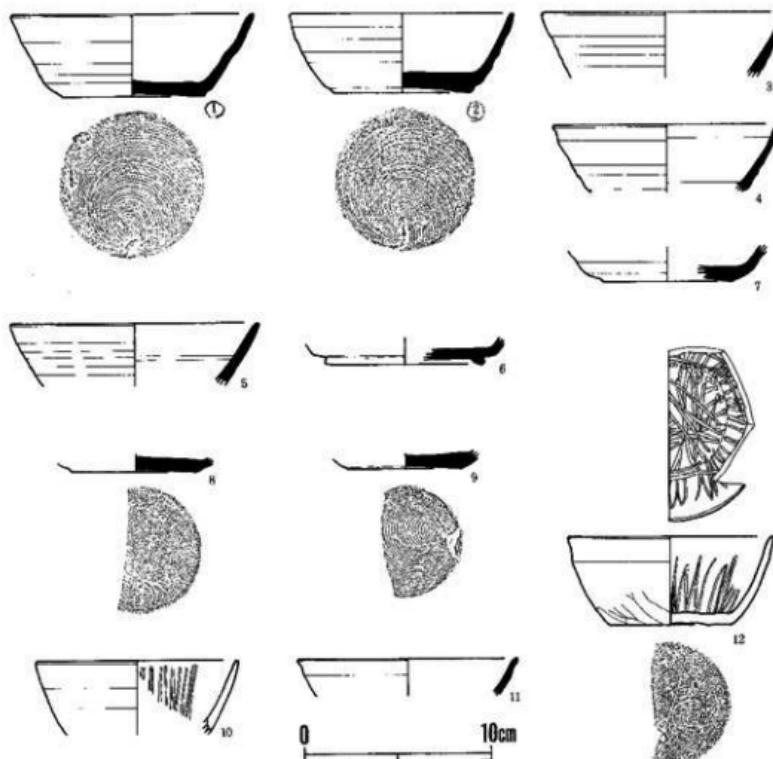


第4図 第1号住居址平面図

出土土器（第5・6図）

1～9、11は須恵器環である。1は口径12.6cm、器高4.3cm、底径7.2cmを測る。内外面共ナデ調整を施し底部には糸切り痕を残す。焼成はやや良く、色調は灰褐色を呈する。2は口径11.7cm、器高4.2cm、底径7.2cmを測る。1同様内外面共ナデ調整が施されており、底部には糸切り痕を残す。焼成はやや良く、色調は一部赤味を帯びているが、灰白色を呈する。3～5、11は口縁部破片である。3は口径12.8cm、現存高3.5cmを測る。内外面共ナデ調整、焼成は不良で赤褐色を呈する。4は口径12cm、現存高3.6cmを測る。焼成はやや不良で表面は赤味を帯びている。5は口径13.2cm、現存高3.3cmを測る。内外面共ナデ調整、焼成は良好で色調は青灰色を呈する。11は口径11.5cm、現存高2cmを測る。内外面共ナデ調整、焼成は良好で色調は黒褐色を呈する。6～9は底部破片である。6は底径9.7cm、底部糸切り後に高台を貼付している。7、8はいずれも底部糸切り痕を残す。

10、12は土師器環である。10は口径10.6cm、現存高3.9cmを測る。外面はナデ後ヘラミガキ

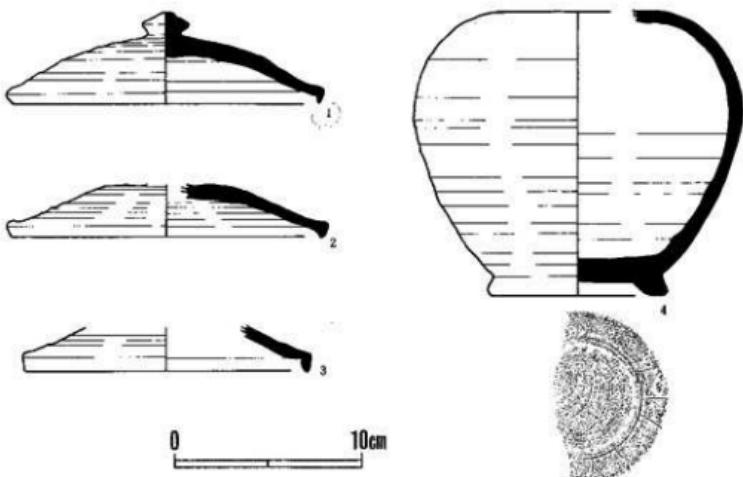


第5図 第1号住居址出土遺物(1)

され内面には暗文がみられる。焼成は良好で赤褐色を呈する。12は口径10.8cm、器高4.7cm、底径6.4cmを測る。外面はナデ後に斜位ヘラ削り、内面には暗文がみられる。みこみ部の暗文は不規則に施されている。焼成は良好で赤褐色を呈する。

第6図1～3は須恵器蓋形土器である。1は口径16.2cm、器高4.8cmを測る。外面上半はロクロ整形後、回転ヘラ削りが施される。2は口径16.4cm、3は口径14.8cmを測る。いずれも外面上半はロクロ整形後、回転ヘラ削りが施される。

4は須恵器長頸瓶である。頸部より上を欠損し現存高15.1cm、底径8.8cmを測る。内外面共にナデ調整され、外面には褐色の自然釉がかかっている。底部は回転糸切り後に高台を貼付している。焼成は良好で色調は灰白色を呈する。

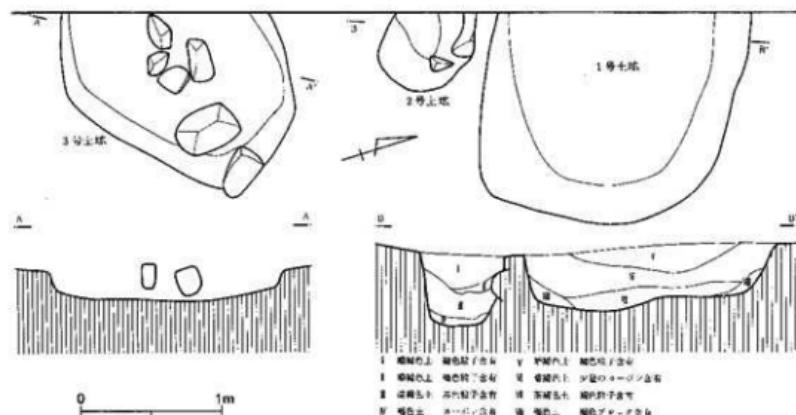


第6図 第1号住居址出土遺物 (2)

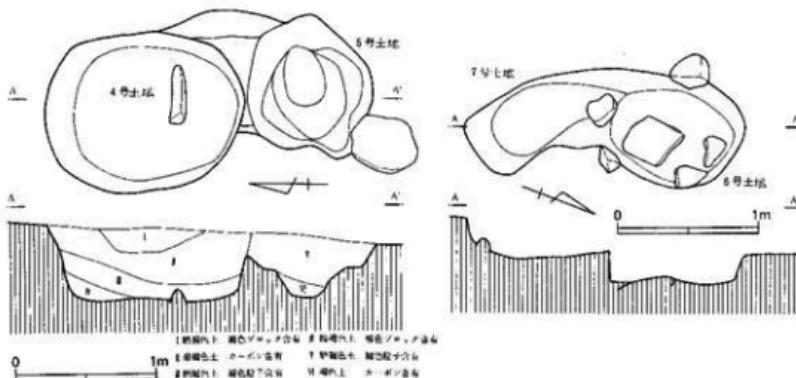
第2節 土 壤 (第7~10図)

1号土壤 (第7図)

C-2グリッドに位置する。西側は調査区域外にかかり不明であるが、開口部は隅丸方形を呈するものと思われ、短径1.8m、長径2.5mを測るものと推定される。確認面からの深さは0.37~0.42mを測る。出土遺物はあまりなく、図示できるものは第10図1のみである。須恵器高台付壺形土器で口径14.8cm、器高5.6cm、底径11cmを測る。内外面共ナデ調整が施されている。底部は糸切り後高台を貼付している。焼成は良好で色調は青灰色を呈する。



第7図 1・2・3号土壤平面図



第8図 4・5号土壤平面図

第9図 6・7号土壤平面図

2号土壙（第7図）

D-2グリッドに位置し、1号土壙同様西側は調査区域外にかかる。開口部は梢円型を呈し、短径0.62m、長径0.8m程度を測るものと推定される。確認面からの深さは0.51mを測る。出土遺物は土師質土器の小破片が僅かに出土したのみであり、図示できるものは全くなかった。

3号土壙（第7図）

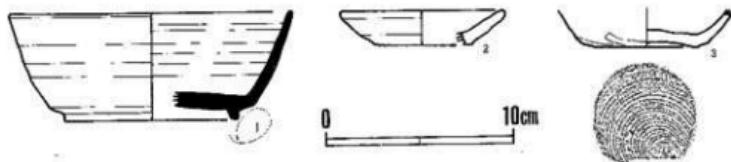
D-2グリッドに位置する。1・2号土壙同様西側は調査区域外にかかる。開口部は不正梢円型を呈し、短径1.3m、長径2mを測るものと推定される。確認面からの深さは0.15mを測る。覆土中に20cm程度の礫がまとまって検出されたが、人為的なものかどうかについては不明。出土遺物はほとんどみられず土師質土器が僅かに出土したのみであった。

4号土壙（第8図）

D-2グリッドに位置し、南側で5号土壙と重複する形で確認された。開口部は梢円形を呈し、長径1.4m、短径1.1mを測る。確認面からの深さは0.5mを測る。出土遺物は少なく、図示できるものは第10図2のみである。土師質の壺形土器で口径8.6cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測る。底部は回転糸切り痕を残す。焼成は良好で淡褐色を呈する。

5号土壙（第8図）

E-2グリッドに位置し、北側を4号土壙と、南側を第1号住居址と重複する形で確認された。それぞれの新旧関係は第1号住居址→5号土壙→4号土壙となる。開口部は不正梢円形を呈し短径0.9m、長径1.7m程度を測るものと推定される。開口部より2段に掘り込まれ、深さは0.45mを測る。出土遺物は少なく図示できるものは第10図3のみである。土師質壺形土器で現存高2.1cm、底径5.4cmを測る。ナデ調整後、斜めヘラ削りを施す。底部には回転糸切り痕を残す。



第10図 土壙出土遺物（1・1号土壙、2・4号土壙、3・5号土壙）

6号土壙（第9図）

E-2グリッドに位置し、北側を第1号住居址と南側を7号土壙と重複する形で確認された。土壙内覆土は攪乱されており、両土壙の新旧関係は不明であるが、6号土壙より第1号住居址の方が古い。開口部はほぼ円形を呈し、短径0.8m、長径1mを測るものと推定される。確認面からの深さは、0.2mを測る。出土遺物はみられなかった。

7号土壙（第9図）

F-2グリッドに位置する。短径0.5m、長径1.6m程度を測るものと推定される。確認面からの深さは0.4mを測る。出土遺物はみられなかった。

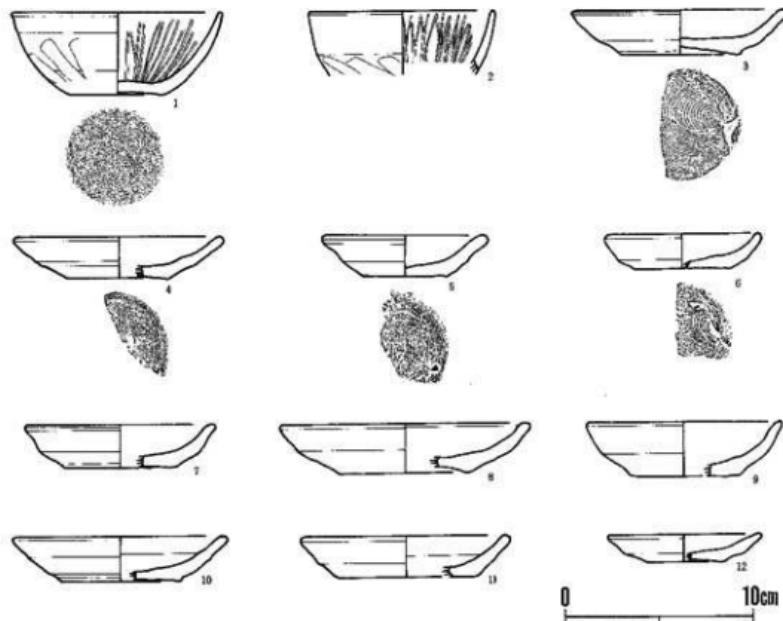
第IV章 遺構外出土遺物

第1節 土器（第11図）

本遺跡の遺構外からも第3図に示すように土器が出土したが、それらのうち、図示できるものは第11図に示すものだけであった。

1・2は土師器坏形土器である。1は口径11cm、器高4.4cm、底径4.8cmを測る。外面はナデ調整後に斜位ヘラ削りを施す。内面には、放射状の暗文がみられる。底部には回転糸切り痕を残す。焼成は良好で色調は褐色を呈する。2は口径9.8cm、現存高3.4cmを測る。外面はナデ調整後、斜位ヘラ削りを施す。内面には放射状暗文がみられる。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

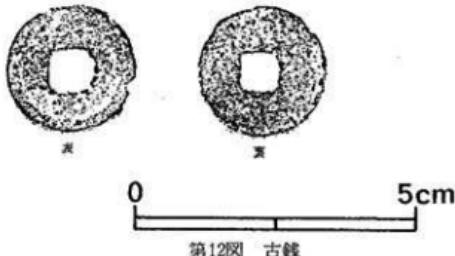
3～12は土師質の坏形土器である。全て底部は回転糸切り痕を残すが図示できるものは3～6のみであった。



第11図 遺構外出土土器

第2節 古銭（第12図）

B-3グリッドより出土した。遺存状態が非常に悪いため種類については不明であるが、「□□元寶」とわずかに判読できる。

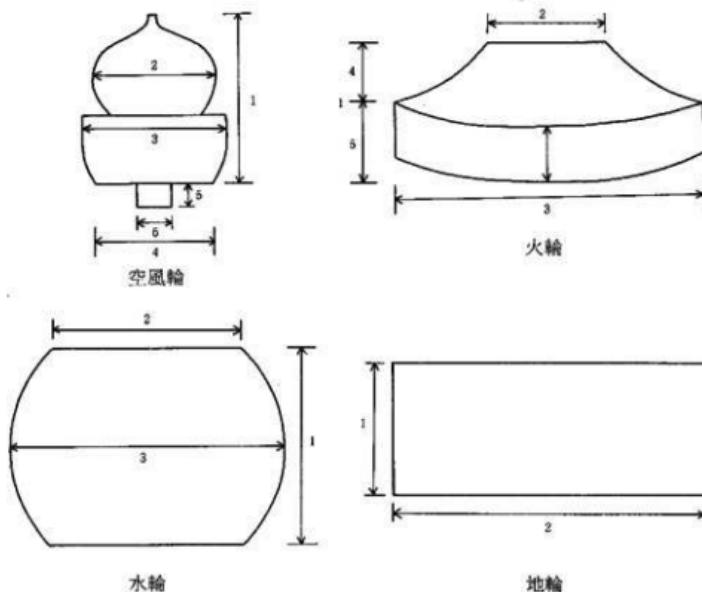


第3節 石造物（第14～20図）

本遺跡の調査区域内ではないが、本年度の開場整備工区内にあった石造物が工事業者によって御崎神社境内に移動されていた。そのため、本報告書においてこれらの石造物について報告することにした。

1. 五輪塔（第14図～19図）

本五輪塔群は普門寺遺跡南約20m程度の場所に集められていた。その時の状況は図版13-1・2のような状況であった。上記のように工事業者によって移動されたために五輪塔の下部構



第13図 五輪塔計測部模式図

については全く不明である。五輪の各部は1基（第14図1、第15図1、第18図1、第19図1）を除いてはセット関係が不明なため、個々に実測図を掲載した。紀年銘等全くないため年代は不明であるが上記の1基を除いては室町時代から江戸時代初期頃に造られたものと思われる。

空風輪（第14図）

1～3は火輪と組み合う柄を持っている。そのうち1は空輪部が円形に近く、他の2つとは異なり古い形態を有していると言えよう。4は空輪頂部をつまみ上げたように造っている。10・11は他と比較して空輪部が円形に近く、中間部の彫りが大きくなっている。12は前後面が両側面に比べかなり幅広く断面橢円形を呈しており、正面観のみを意識し、粗雑な造りとなっている。14はシルエットが直線的となり円筒形を呈する。

火輪（第15～17図）

1～6は上面に風輪受けの納穴を持つ。内でも1は軒反りが平均的に反っている古式な形態をとるものである。6・14は上面幅が狭く、屋根が大きくなっている。逆に16～18は全体におしつぶしたような形で扁平化し、屋根は小さなものとなる。また軒の下端に比してほとんど直線的になっている。

水輪（第18図）

1は四方向に「バ・バー・バン・バク」の梵字が葉研彫りされており、上下面は深く彫られ、ノミ痕がみられる。ほとんど最大径が中央にあり、全体的に扁平化している。12は火輪受けの納穴があり、最大径は中央より上部にある。

地輪（第19図）

全体に幅が20cm前後のものが最も多くなっており、上面幅と底面幅がほぼ同じとなるものが多い。しかし上面幅より底面幅が小さくなる1・9・15～17などもみられる。1は底面の彫込みが深くなっている。

	1	2	3	4	5	6	石質	備考
1	38.7	27.0	(25.2)	19.5	5.9	10.0	角閃石デイサイト	一部剥離
2	23.3	16.7	15.6	11.1	3.6	7.0	角閃石デイサイト	1/3欠損
3	24.2	15.6	14.9	8.5	3.0	4.7	角閃石デイサイト	一部欠損
4	16.5	15.0	14.0	9.3	—	—	角閃石デイサイト	一部欠損
5	12.4	11.2	10.4	(6.0)	—	—	角閃石デイサイト	1/2欠損
6	(14.8)	14.6	13.3	9.0	—	—	角閃石デイサイト	頂部欠損
7	16.9	15.1	13.6	(8.0)	—	—	角閃石デイサイト	一部欠損
8	14.5	12.2	11.3	(6.8)	—	—	角閃石デイサイト	一部欠損
9	(13.9)	12.5	11.5	8.2	—	—	角閃石デイサイト	頂部欠損
10	22.0	16.7	16.3	10.8	—	—	角閃石デイサイト	完形
11	22.4	17.5	16.6	11.1	—	—	角閃石デイサイト	ほぼ完形
12	14.0	15.3	15.1	11.7	—	—	霞輝石安山岩	一部欠損 断面橢円形
13	14.8	13.4	11.8	9.2	—	—	角閃石デイサイト	完形
14	23.8	16.7	15.5	10.0	—	—	角閃石デイサイト	ほぼ完形

第1表 空風輪計測表

	1	2	3	4	5	6	石 質	備 考
1	27.3	22.0	43.0	13.3	10.8	8.8	角閃石デイサイト	ほぼ完形 火輪受け穴有り W=11.5 L=7.7
2	(18.5)	不 明	(26.8)	(9.1)	不 明	5.7	角閃石デイサイト	表面剥離 火輪受け穴有り W=2.5 L=5.1
3	14.5	11.5	23.0	7.3	(5.5)	4.5	角閃石デイサイト	一部欠損 火輪受け穴有り W=6.3 L=3.5
4	10.0	8.7	16.9	(5.6)	2.7	2.3	角閃石デイサイト	ほぼ完形 火輪受け穴有り W=5.0 L=1.0
5	14.5	11.0	25.6	3.7	9.5	6.4	角閃石デイサイト	一部欠損 火輪受け穴有り W=5.3 L=1.0
6	25.5	9.0	38.9	11.8	6.0	4.5	角閃石デイサイト	一部欠損 火輪受け穴有り W=6.1 L=不明
7	20.7	12.5	32.7	10.5	(7.0)	5.6	角閃石デイサイト	一部欠損
8	14.5	9.7	23.8	(5.9)	(6.0)	5.1	角閃石デイサイト	ほぼ完形
9	19.4	11.7	30.7	8.4	6.9	5.6	角閃石デイサイト	ほぼ完形
10	15.0	7.1	16.5	5.9	3.3	3.1	角閃石デイサイト	ほぼ完形
11	18.6	10.6	31.3	9.3	(6.6)	5.0	角閃石デイサイト	一部欠損
12	13.5	8.4	21.1	8.1	4.1	3.5	角閃石デイサイト	一部欠損
13	11.5	7.6	18.9	5.8	3.6	2.7	角閃石デイサイト	一部欠損
14	21.2	10.0	29.8	10.5	(8.2)	7.7	角閃石デイサイト	一部欠損
15	13.5	9.5	22.0	6.1	5.0	4.1	角閃石デイサイト	ほぼ完形
16	9.6	8.7	20.7	5.2	4.2	3.5	角閃石デイサイト	ほぼ完形
17	9.5	8.1	19.5	3.9	5.1	4.5	角閃石デイサイト	一部欠損
18	9.6	8.5	22.9	4.1	(5.0)	4.3	角閃石デイサイト	一部欠損

第2表 火輪計測表

	1	2	3	石 質	備 考
1	23.0	34.6	45.1	角閃石デイサイト	四方向に梵字有り
2	17.5	26.0	30.8	角閃石デイサイト	完形
3	13.5	15.2	19.7	角閃石デイサイト	一部剝離
4	12.0	11.5	17.5	角閃石デイサイト	一部欠損
5	12.0	15.0	19.2	輝石安山岩	一部欠損
6	9.5	14.5	19.0	角閃石デイサイト	完形
7	12.4	11.3	19.9	輝石安山岩	完形
8	12.5	15.8	21.6	角閃石デイサイト	完形
9	10.3	11.4	17.5	角閃石デイサイト	完形
10	18.6	21.0	26.7	輝石安山岩	完形
11	17.5	22.5	29.1	角閃石デイサイト	完形
12	14.8	15.5	23.7	角閃石デイサイト	完形 火輪受けの穴有り W= 5.1 L= 2.3

第3表 水輪計測表

	1	2	石質	備考
1	24.7	39.8	角閃石デイサイト	ほぼ完形
2	25.7	31.0	角閃石デイサイト	ほぼ完形
3	22.0	29.4	角閃石デイサイト	ほぼ完形
4	13.7	22.4	角閃石デイサイト	ほぼ完形
5	20.2	25.6	角閃石デイサイト	ほぼ完形
6	17.4	28.9	角閃石デイサイト	ほぼ完形
7	18.0	23.0	角閃石デイサイト	一部剥離
8	15.0	20.1	角閃石デイサイト	ほぼ完形
9	14.1	20.2	角閃石デイサイト	完形
10	15.2	21.5	角閃石デイサイト	完形
11	18.6	22.4	角閃石デイサイト	ほぼ完形
12	14.5	18.5	角閃石デイサイト	一部欠損
13	13.8	20.0	角閃石デイサイト	ほぼ完形
14	10.8	20.9	角閃石デイサイト	ほぼ完形
15	12.4	16.4	角閃石デイサイト	ほぼ完形
16	12.3	20.0	角閃石デイサイト	ほぼ完形
17	11.0	19.9	角閃石デイサイト	ほぼ完形
18	14.5	19.0	角閃石デイサイト	ほぼ完形

第4表 地輪計測表

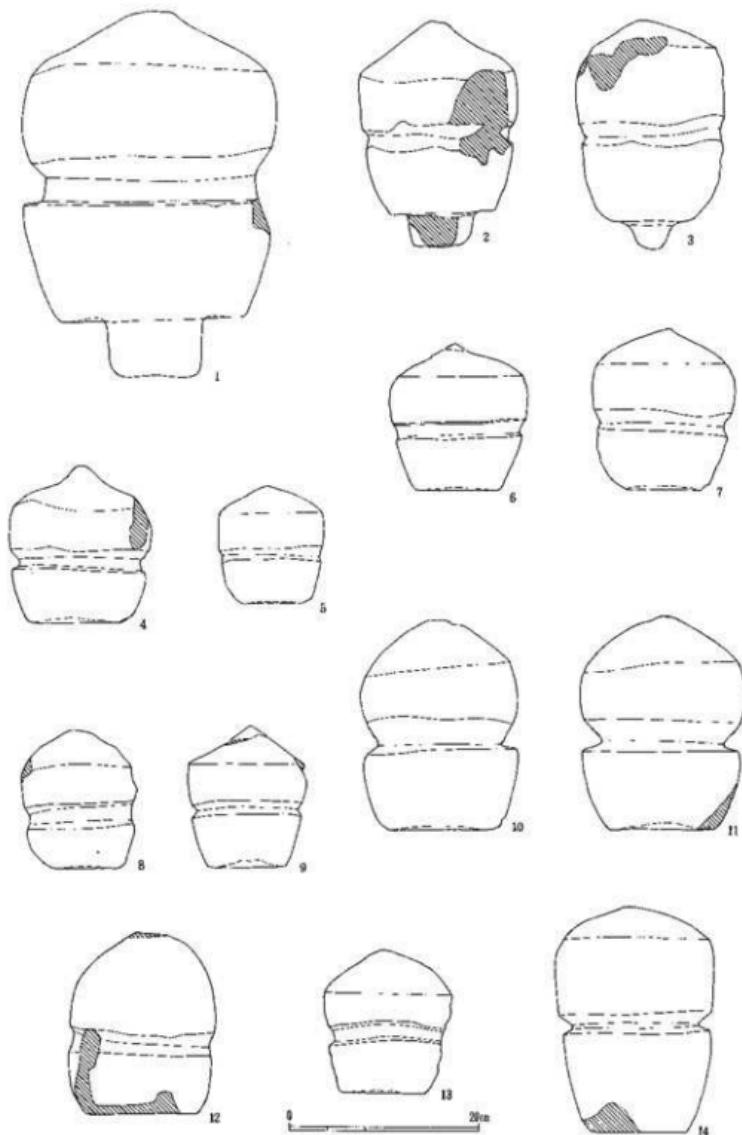
2. 板碑(第20図)

1は頭部を欠損しているが山形にし、その下に1条線を線刻している。現存高61cm、幅29cm、厚さ上部13cm、下部16cmを測る。柄部は長さ5.5cm、幅11cm、厚さ11.5cmを測る。碑面中央部から下端にかけて高さ44cm、幅21cm程を彫りくぼめ、その内に合掌型の地蔵立像を半肉彫りにしている。地蔵高36cmを測る。石質は角閃石デイサイトである。

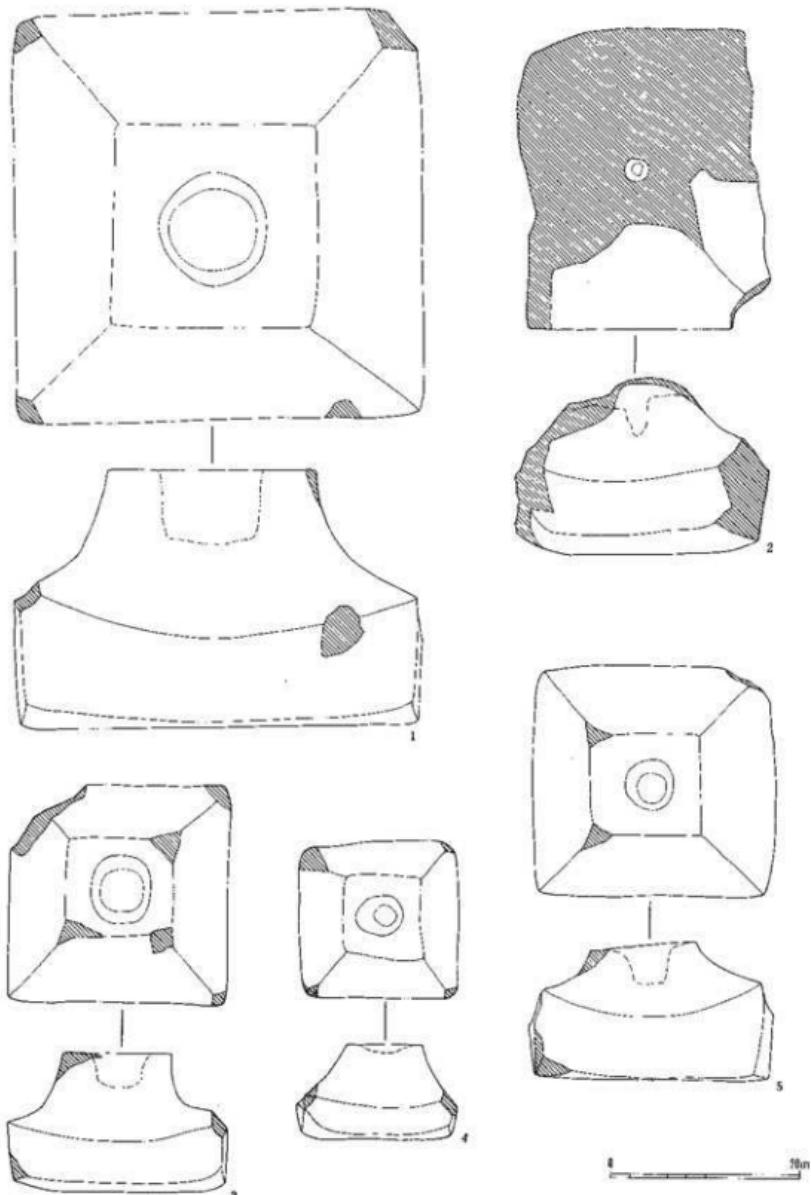
2は頭部を山形にし、その下に1条の帯条線を持つ。総高75.5cm、上部幅31cm、下部幅29cm、厚さ頂部9cm、中下部16cmを測る。柄部は長さ11cm、幅15cm、厚さ10cmを測る。頭部の山形内に直径10cmの正円と三日月を並列して配している。碑面には勢至を表わす「サク」の種子を刻みその下に「南無阿弥陀佛」という銘文を持つ。またその両脇に「時大永」「五年乙酉十一月」と紀年銘を対置している。石質は安山岩である。

3は頭部を山形にするものの、他の3基とは異なり、条線を持たない。総高96cm、上面幅28cm、中央部幅32cm、下部幅35cmを測り、全体的に船形となる。柄部は長さ10cm、幅19cm、厚さ12cmを測る。碑面上部に直径10cmの日・月をやや斜位に配している。また中央部を7cm程船形に彫りくぼめ、その内に合掌型の地蔵立像を半肉彫りにしている。船形は縦35cm、横19cm、地蔵高27cmを測る。紀年銘、銘文は認められない。石質は安山岩である。

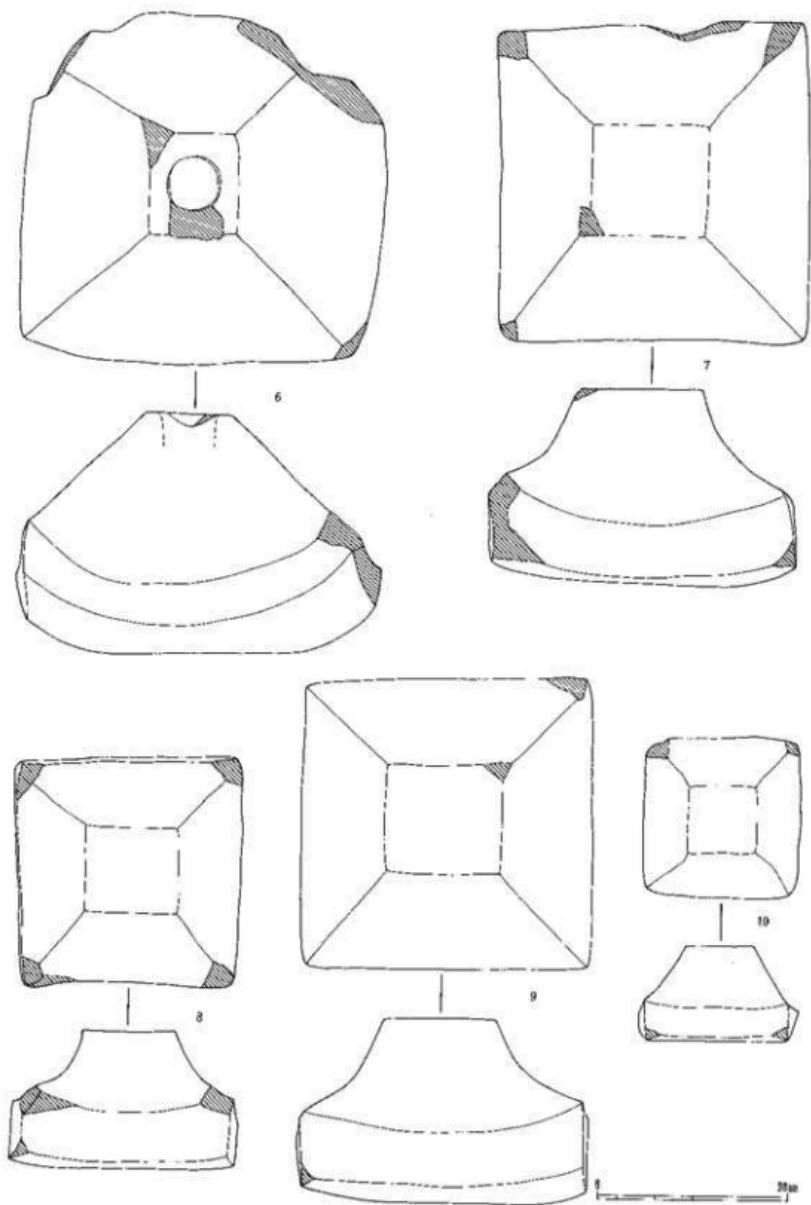
4は頭部を山形にし、その下に2条線を線刻している。現存高42.5cm、上面幅19cm、中央部幅25cm、下部幅17cm、厚さ10cmを測る。柄部は欠損しており長さは不明であるが幅6cm、厚さ5cmを測るものと思われる。条線下に直径9.5cmの日月を並列している。紀年銘、銘文は認められない。石質は角閃石デイサイトである。



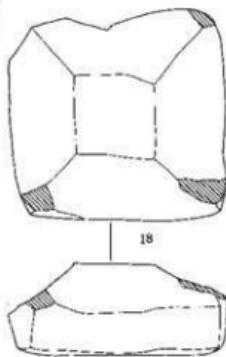
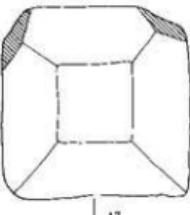
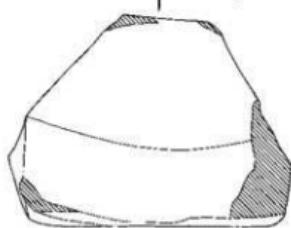
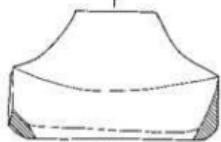
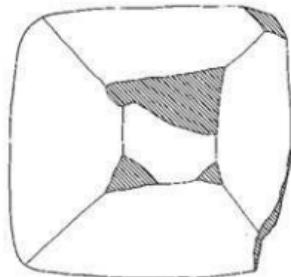
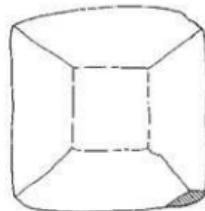
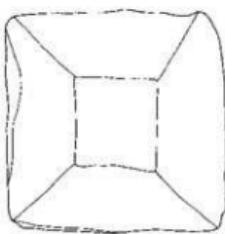
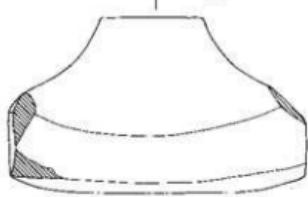
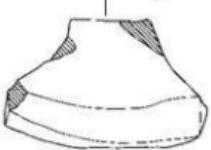
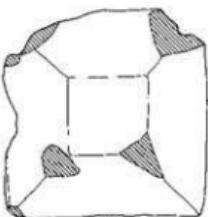
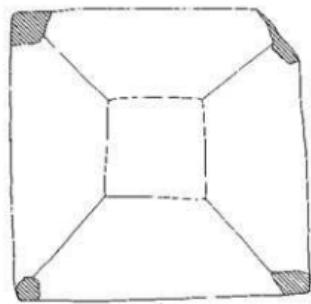
第14図 空風輪



第15図 火輪 (1)

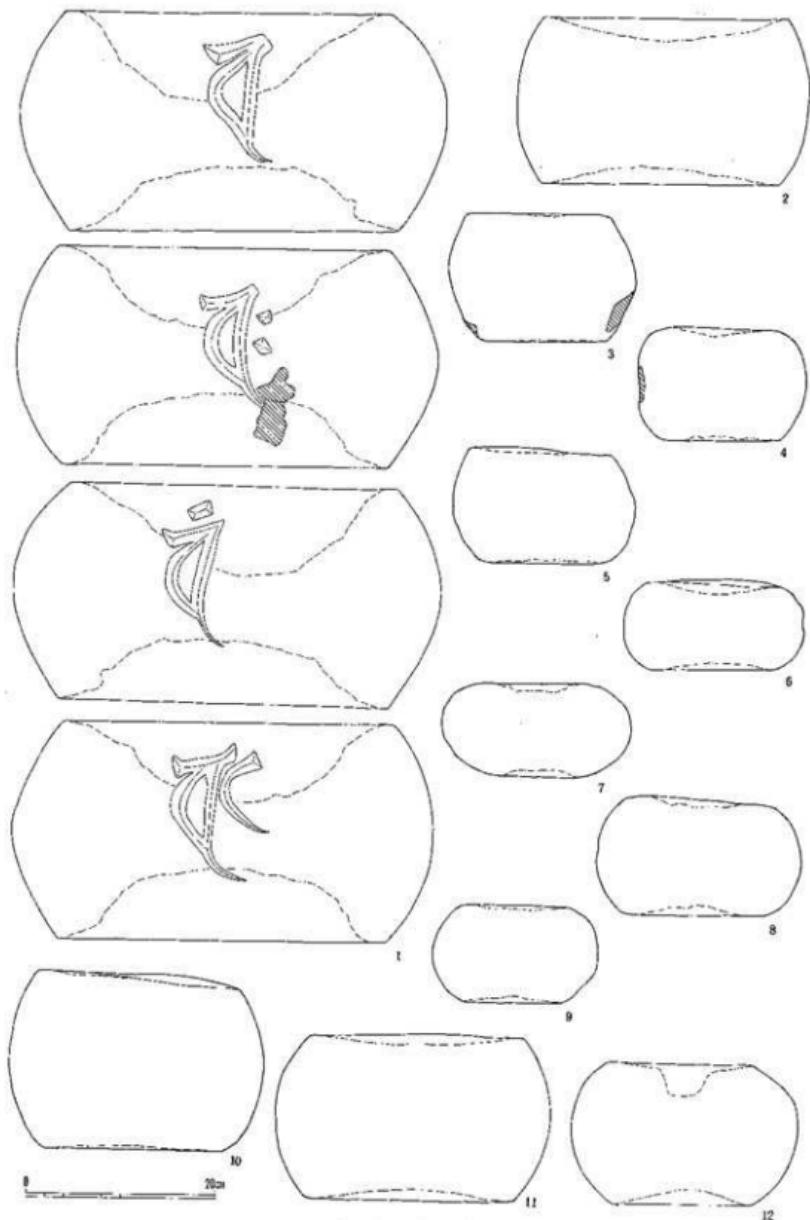


第16図 火輪(2)

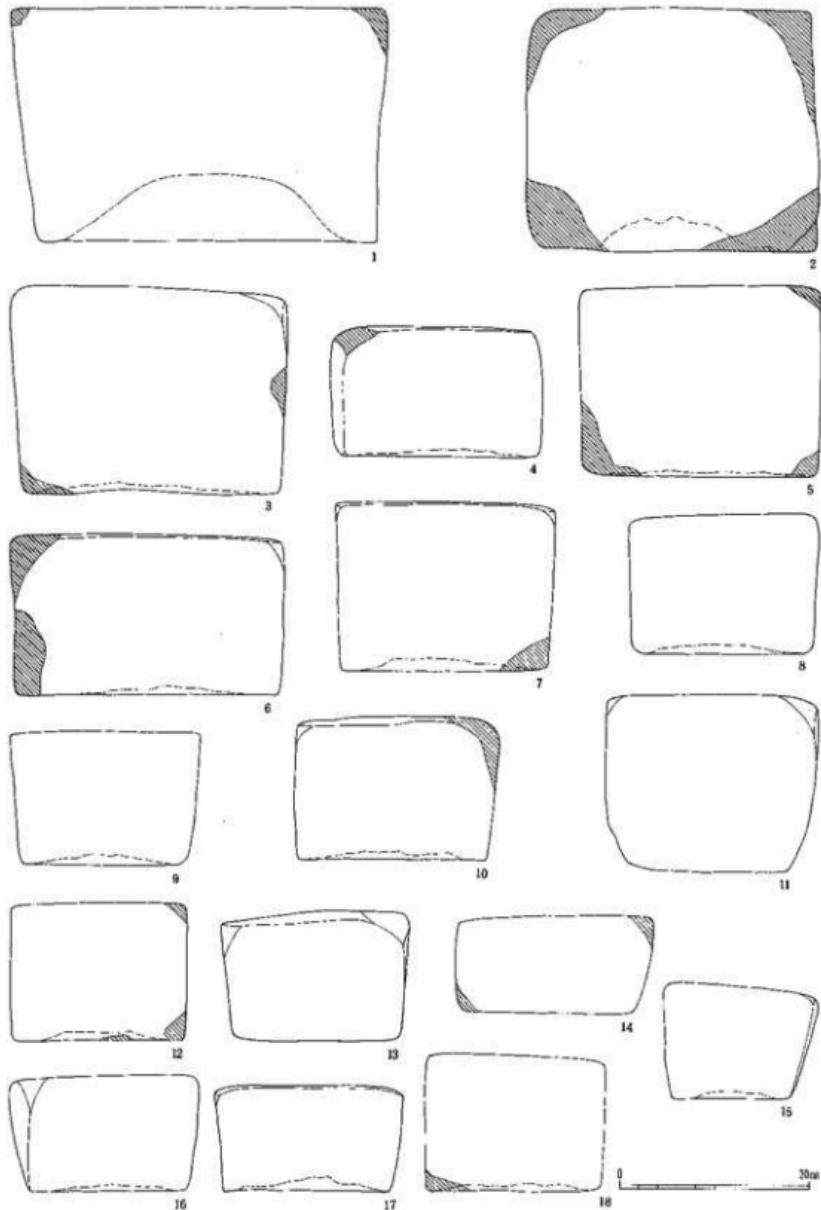


0 20mm

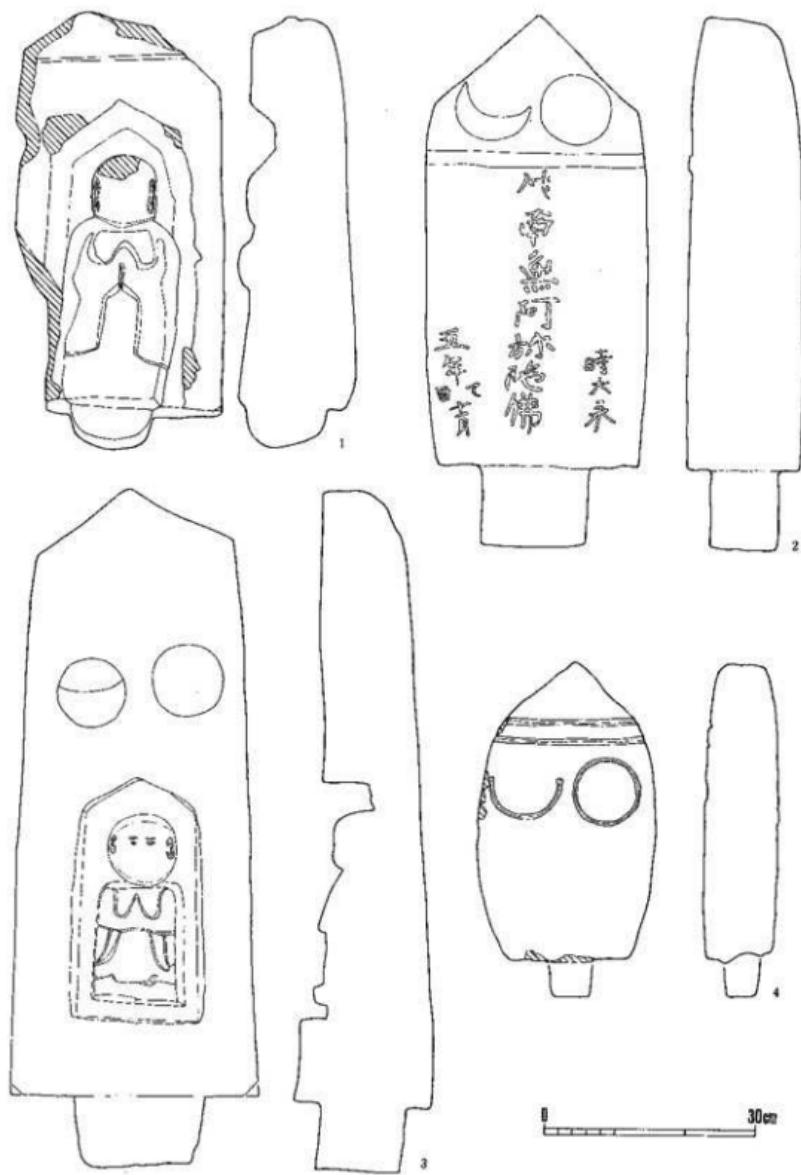
第17図 火輪(3)



第18図 水 輪



第19図 地輪



第20図 板 碑

第V章 明野村の板碑

今回普門寺遺跡の調査と合わせて小袖地区に在った五輪塔および板碑群について報告する機会を得た。北巨摩地方、特に明野村は石造物の宝庫として古くから知られている。それらについては既に村内の研究者によって報告されている¹¹⁾。明野村における石造物についてはそれらを参照されたい。

ここでは明野村にみられる板碑について現在までに報告されたものと今回の踏査によって明らかにされたものについてここに記載し、資料報告としたい。

1. 小笠原厚芝おかま地蔵の板碑（村指定文化財）

地蔵などの石造物が普段は地下の石室に納められていることからおかま地蔵と呼ばれている石造物群中に板碑が2基みられる。

1基は頭部を山形にしてその下に2条の帯条線をもっている。総高80cm、幅28cm、厚さ14cmを測る。また、柄部は長さ8cm、幅11cmを測る。条線下に直径9cmの日月を表わした正円を3cm程凸彫りし、並列している。石質は安山岩である。

もう1基は同様に頭部を山形にしてその下に2条線を線刻している。総高69cm、上部幅28cm、下部幅27cm、厚さ13cmを測る。また柄部は長さ6cm、幅8cm、厚さ10cmを測る。2条線の下に直径9cmの日月を表わす正円を並列している。また碑面中央を5cm程船形に彫りくぼめ、その中に合掌型の地蔵立像を半内彫りしている。船形は縦36cm、横18cm、地蔵高27cmを測る。いずれも紀年銘、銘文は認められない。

その他の石造物として、共に頭を欠損する地蔵2基、五輪塔空風輪11基、火輪1基、地輪1基、宝鏡印塔相輪2基がみられた。

小笠原本村福性院の板碑

福性院は貞觀年間慈覚の開山と伝えられる新義真言宗の寺院である。後の文正元年に小笠原政康が中興したらしいが、安永年間の火災によって旧記を失い詳細については明らかでない。境内には子安地蔵をはじめとして数多くの石造物がみられるが、その中に2基の板碑がみられる。

1基は頭部を山形にし、その下に2条線を配している。総高74cm、幅40cm、厚さ上部15.5cm、下部19cmを測る。下部には幅3cm、厚さ1cmの凸帶を持つ。この板碑は裏面にも同様な彫刻が施されており、両面板碑とでも言うべき形をとっている。1石2基の双式板碑、連碑と呼ばれているものは武藏系板碑などにはみられるが、両面板碑の形式をとっているものは非常に珍しいと言えるであろう。両面共に銘文が彫られていたようであるが、近くにある長清寺との勢力争いの際に削り取られてしまったらしい。そのため、紀年銘、銘文共に不明である。

もう1基も頭部を山形にし、頂部より31cmのところに2条線を持つ。総高97cm、上部幅20cm、中央部幅23cm、下部幅25cm、厚さ上部15cm、下部17cmを測る。碑面中央部に深さ5cm程を方形に

彫りくぼめ、その内に合掌型の地蔵立像を半肉彫りにしている。紀年銘、銘文は認められない。

3. 下神取の板碑

下神取地区水田の石垣に小さな祠があり、その内に2基の板碑と水輪を欠く五輪塔1基が確認された。2基の板碑とともに祠の内に整然と立てられていた。

1基は頭部を山形にし、その下に3条の線によって形成された2条の帯条線を持つ。総高56cm、上面幅22cm、下部幅24cm、厚さ上部9.5cm、下部12cmを測る。柄部は長さ6cm、幅6cmを測る。頭部の山形内に直径4cmの正円を並列している。2条線下に直径6cmと6.5cmの正円を斜位に配している。また、碑面下部に1条の条線を刻んでいる。

もう1基は板碑下半が地中に埋もれているために正確な総高等については不明であるが総高60cm以上、厚さ11cmを測る。頭部を山形にし、その下に3条の帯条線を持つ。碑面には直径6cmの日月を表わす正円を持っている。紀年銘、銘文共に認められない。

いつ頃からこの祠が作られたかについては不明である。

4. 北組の板碑

上手北組の公会堂前の道路脇に立てられている。板碑は3基あり、1基の板碑に2体ずつの地蔵を陽刻し3基で六地蔵とする特殊な形態をとる。1基の板碑に六体の地蔵を配した多仏団像板碑は武藏地方に例がみえるようであるが、本板碑の形態をとるものは非常に珍しいと言える。本板碑については既に報告があるのでそれを参考にしたい⁽²⁾。

3基共に頭部を山形にし、2条線を刻んでいる。総高103cm、上部幅31.5cm、下部幅31.7cm、厚さ上部18cm、下部19cmを測る。碑面中央部を方形に彫りくぼめ、2体の地蔵立像を半肉彫りしている。その下に正方形の枠を並置している。地蔵立像は風化が激しいために印相が確認できるものは2基目、3基目の左像の両手に宝珠、3基目右像の合掌印のみである。いずれも紀年銘、銘文共に認められない。石質は3基共に安山岩である。

註(1) 船庭 久『明野の石佛』 1977

『甲州の庚申塔』 1975

篠原紫默「明野の石造物」 広報あけの 1981~

(2) 佐野勝広「甲斐の板碑（その2）」『丘陵』第6号 1979

第VI章 ま と め

今回の調査により平安時代の住居址1軒と土壙7基が検出され、併せて五輪塔・板碑群についても調査することができた。それらについて、調査結果をもとに若干のまとめを行ってみたい。

住居址について

本遺跡からは竪穴住居址が1軒確認されたが前述したようにカマド・柱穴共に確認できなかった。本址は土壙との重複や攢乱を受けていたためにそれによってカマドが削平された可能性はあるものの焼土などのカマドの痕跡が全く確認されなかつたため当初よりカマドは存在しなかつた可能性の方が強いのではないかと思われる。竪穴からは多くの土器が出土したが煮沸を目的として用いられたと考えられる土師器壺の破片があまり確認されなかつたことからも言えるのではないだろうか。

床面はほぼ全面にわたって踏み固められていたため検出は容易であったが、柱穴は確認出来なかつた。しかし、床面に炭化材が多くみられたことから上屋を持っていたことは確実である。

何をもって住居址とするかは難しいが竪穴に上屋を有し、生活用具である土器類を持つことから、本報告書では住居址として報告した。

住居址出土土器について

第1号住居址より出土した土器についてその年代を考えてみたい。

平安時代の土器編年については坂本・末木・堀内氏の研究成果¹¹⁾があるのでそれを参考に考えたい。本址より出土した須恵器壺は口径が12cm前後、底径は7cm程度を測る。底部には糸切り痕を残す。土師器壺には良好な資料に恵まれないが、口径10.8cm、底径6.4cmを測るものがある。外面はナデ後に斜位ヘラ削り、内面およびみこみ部には暗文を持つ。これらに類似した土器が中田小学校遺跡第20号住居址¹²⁾に見られる。第20号住居址出土品は良好な資料で報告者はそれらを9世紀第2四半期にあてている。また9世紀第2四半期に比定される資料として大豆生田遺跡第4号住居址¹³⁾がある。しかし須恵器壺だけを取り上げた場合、本址出土品や中田小学校遺跡出土品に比べ大豆生田遺跡出土品は口径×底径×2の領域内にあるものの底形が6.5cm前後とやや縮少化傾向にある。従って本址の資料は大豆生田遺跡第4号住居址のそれより若干古式であると考えられる。土師器壺をみた場合、9世紀第2四半期に比定されるものは口径11cm前後、底径7cm前後で、底径／口径比は60～65%付近にある。また内面およびみこみ部に放射線状暗文が施されるのが原則とされる。本址の場合底径がやや縮少化しており、底径／口径比は59%となる。また、内面には放射線状暗文が施されるものの、みこみ部の暗文は放射線状とはならず不規則に施されている。これらは新しい様相であると言えよう。

以上のことから、本址の年代はほぼ9世紀第2四半期に比定していいのではないだろうか。しかし、土師器壺に関してはやや時代が降るものと思われる。

石造物について

今回の調査において空風輪14、火輪18、水輪12、板碑4基について報告する機会を得た。しかし五輪塔の場合、空風輪以外はすべて積み重ね式であるために再三積み重ねられた可能性が強く、1基を除いてはセット関係が全く不明なため、空風輪、水輪、地輪の形態変化、火輪の笠の造りなどによってある程度時代相を反映するものの、普遍的なものではなく、バラエティーに富んでいることから、個々の観察からの年代決定は敢えて避けた。県内における五輪塔で時代考証ができるものは少なく、困難はあるものの、今後それらの詳細な検討からある程度時代相が明確になるのではないだろうか。

板碑については今回の調査によって4基が、その他村内に9基、合計13基在ることが明らかになった。一地域に13基もの板碑が存在することは数的にかなり多いと言えよう。また、今後の調査によって増加することは確実であろう。これら多くの板碑が作られた地域的時代背景も同時に考えなければいけない問題であろう。

- 註 (1) 坂本美夫・末木 健・堀内 真「奈良・平安時代土器の諸問題－甲斐地域」『神奈川考古』 第14号 1983
(2) 山下孝司 『中田小学校遺跡』 莢崎市教育委員会 1985
(3) 末木 健 『山梨県中央道発掘調査報告書－須玉町地内－』 山梨県教育委員会
1976

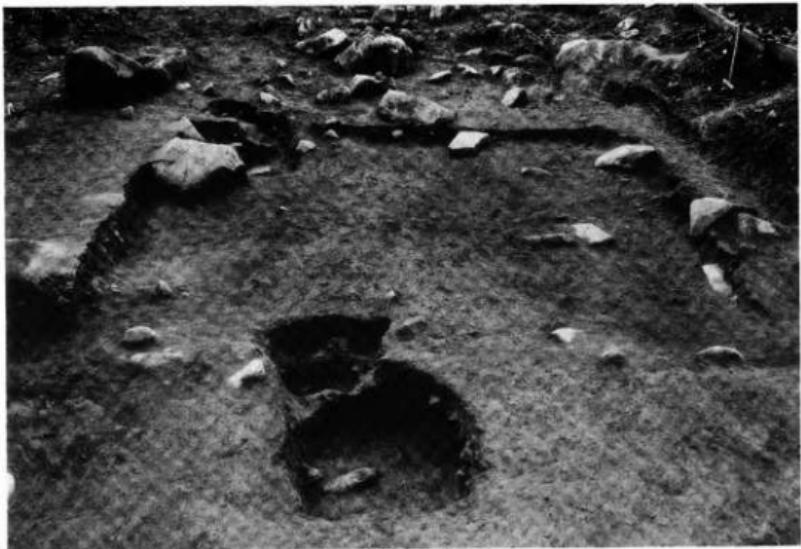
図 版



1. 遺 跡 全 景



2. 調 査 風 景



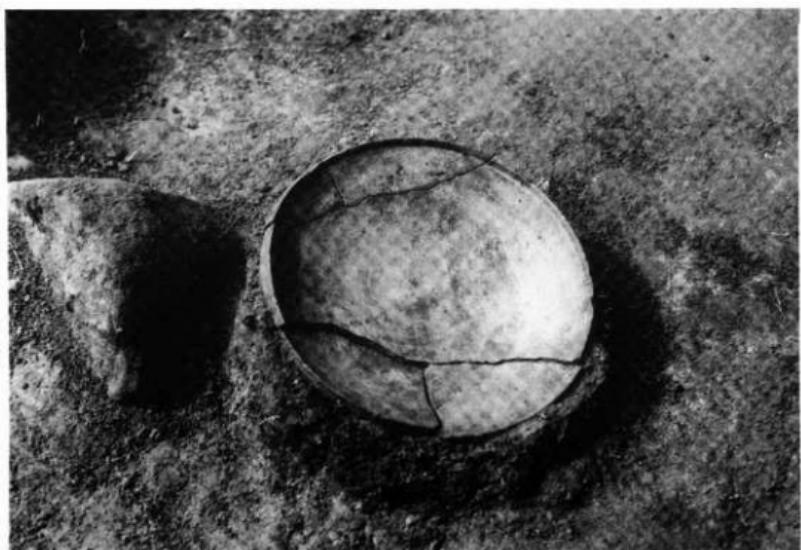
1. 第1号住居址



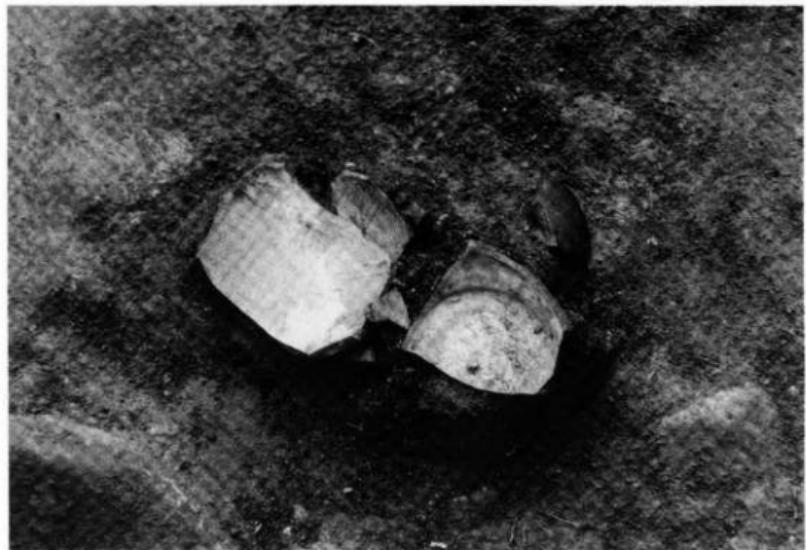
2. 第1号住居址遺物出土狀況



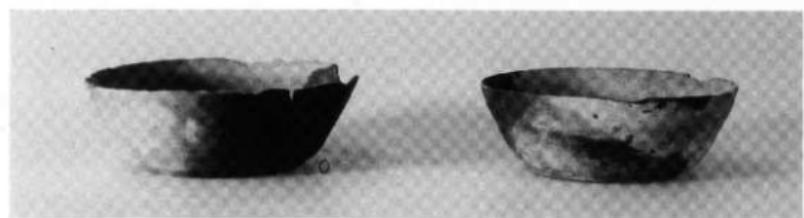
1. 第1号住居址遺物出土状況



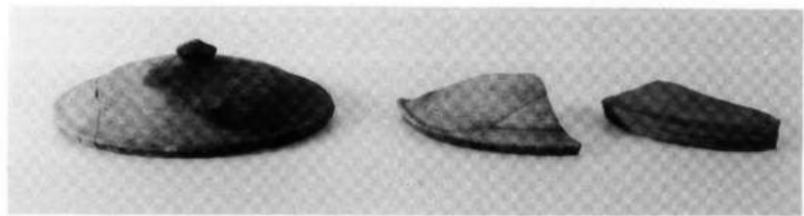
2. 同上



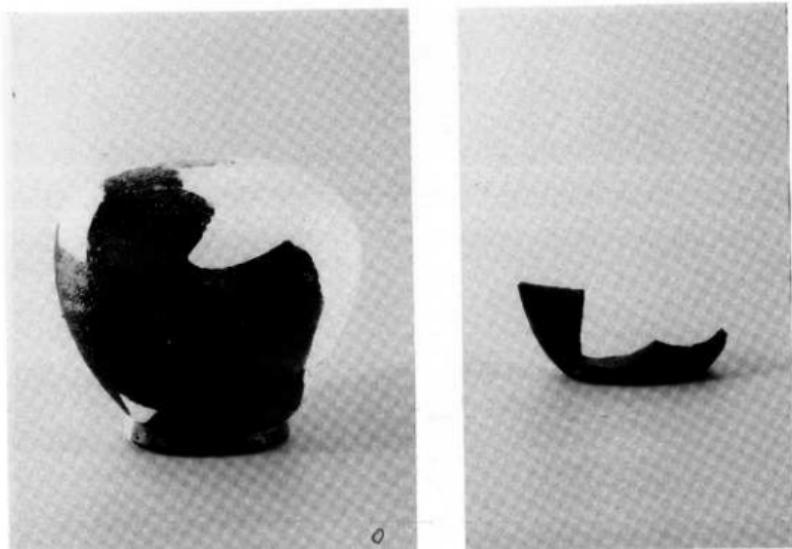
1. 第 1 号住居址遺物出土狀況



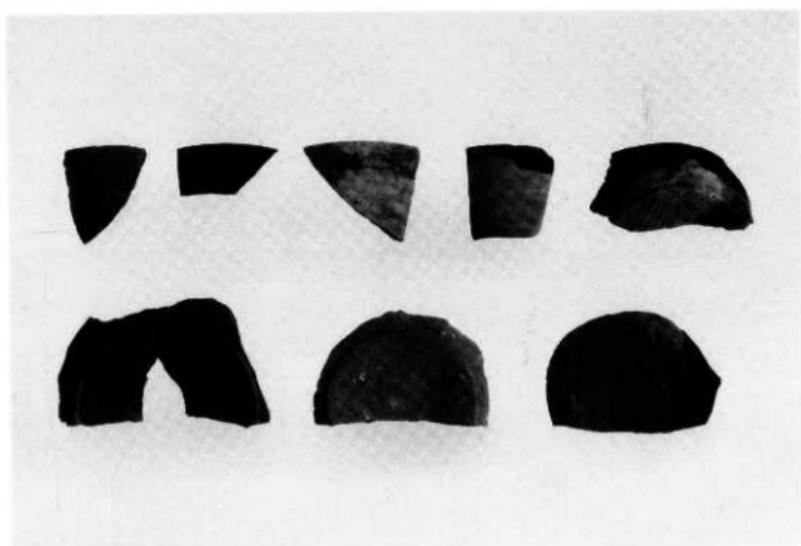
2. 第 1 号住居址出土遺物



3. 同 上



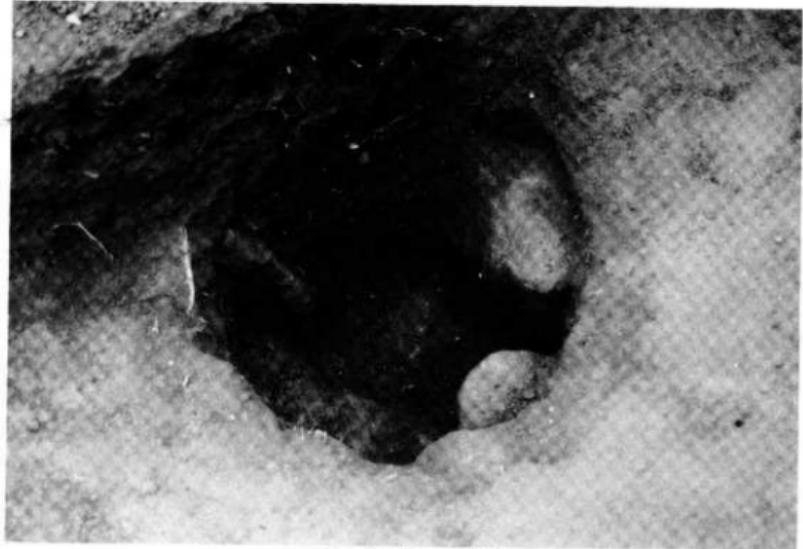
1. 第1号住居址出土遺物



2. 同上



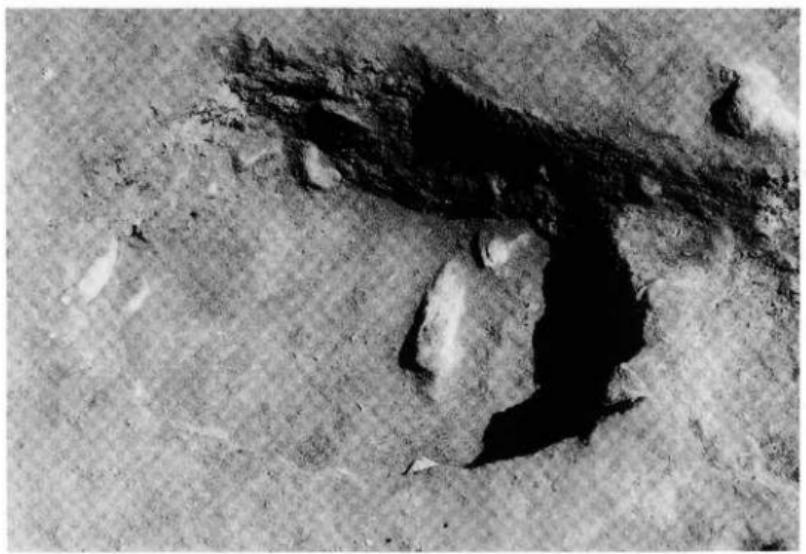
1. 1 号 土 壤



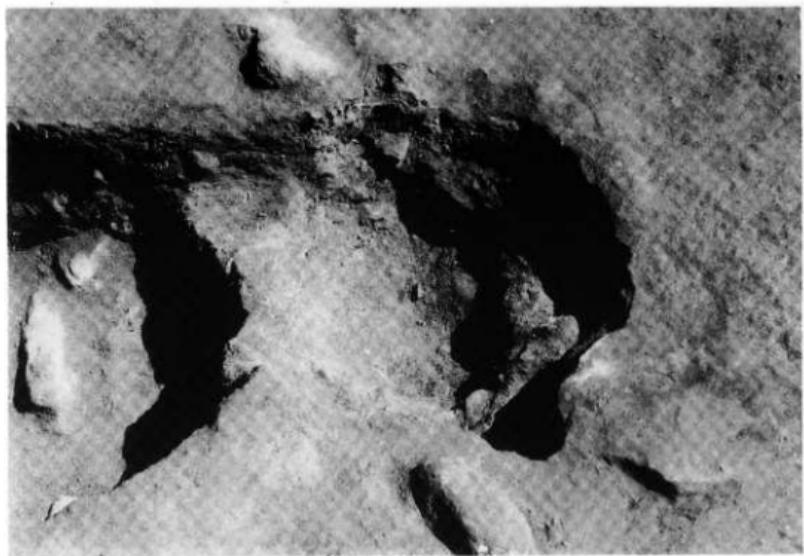
2. 2 号 土 壤



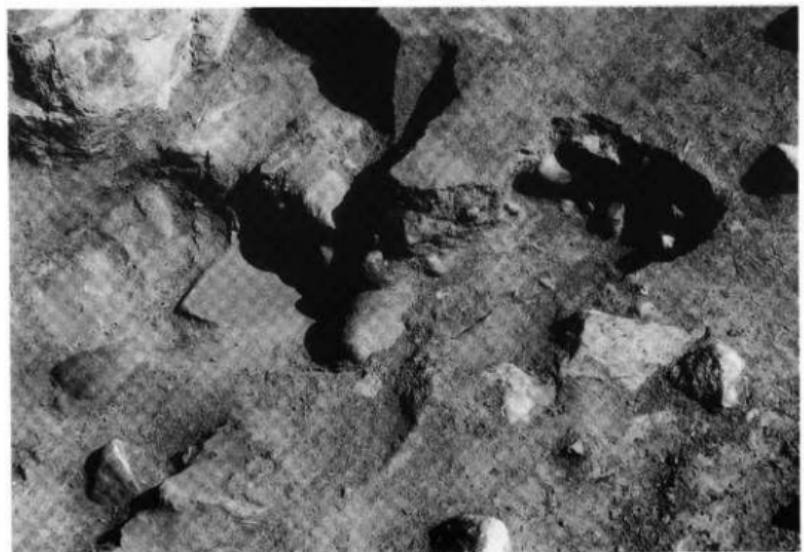
1. 3 号 土 壤



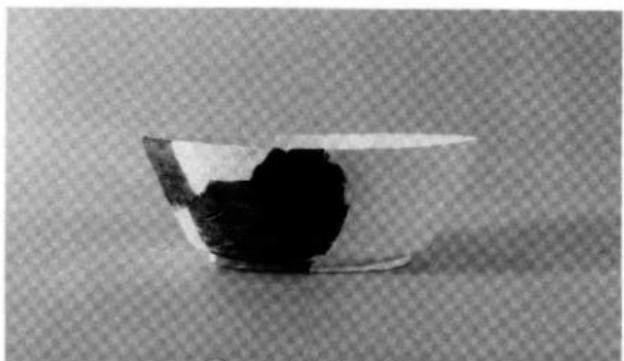
2. 4 号 土 壤



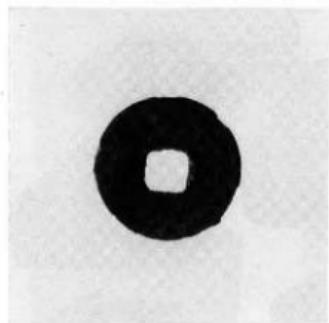
1. 5 号 土 壤



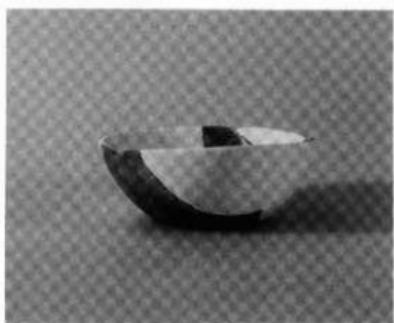
2. 6 • 7 号 土 壤



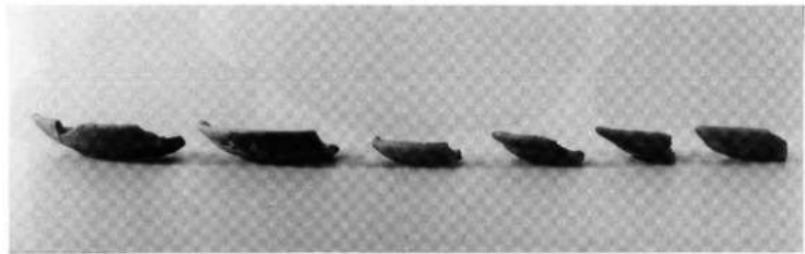
1. 1号土壤出土遺物



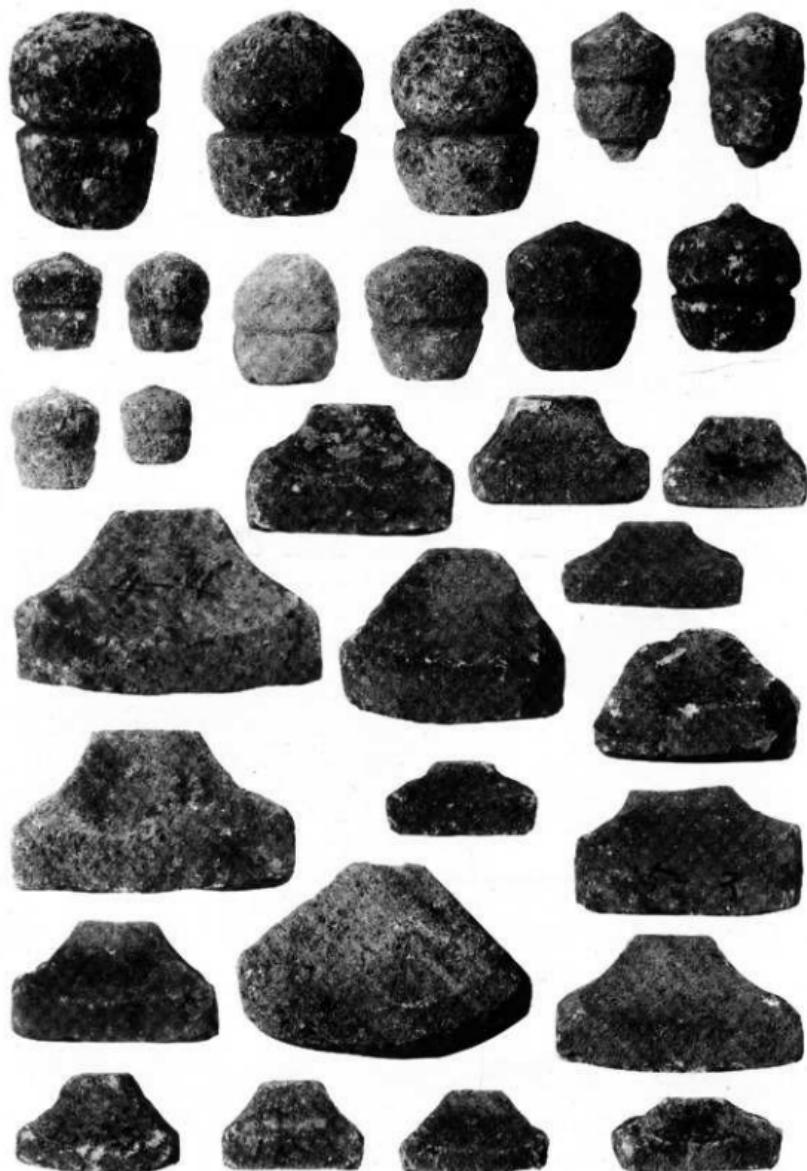
2. 古錢



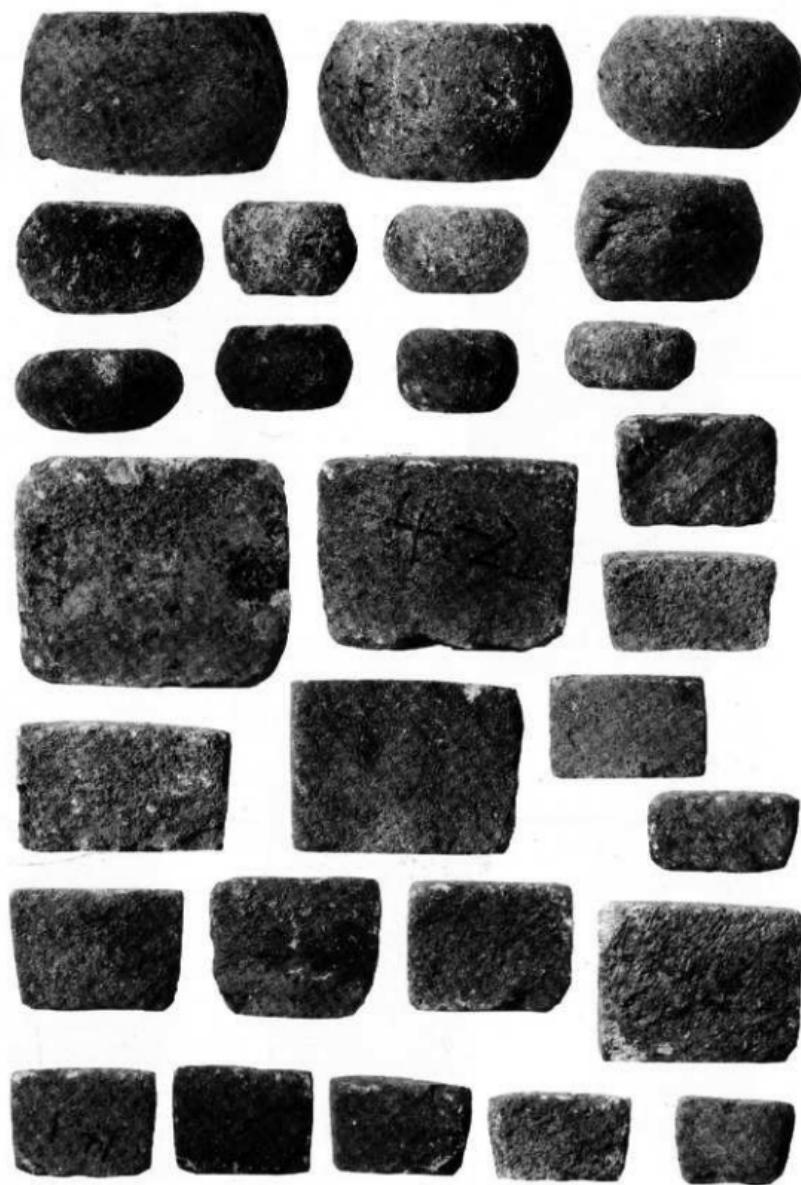
3. 遺構外出土遺物



4. 遺構外出土遺物



空風輪・火輪



水輪・地輪



五輪塔 および 板碑



1. 五輪塔群



2. 同上



1. おかま地蔵の板碑



2. 同 上



1. 下神取の板碑



2. 同上



1. 福性院の板碑



2. 北組の板碑（3基のうち1基）

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

明野の文化財 第2集

普門寺遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

発行所 明野村教育委員会

岐北土地改良事務所

印刷所 佛 岐南堂印刷所

10

+

9

+

8

+

7

+

6

+

5

+

4

+

3

+

2

+

1

+



X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

Fig. 69 造構分布図 ($S=1/200$)

0 10m

